

女教師 蜜のしたたり

鮎川かほる

相葉美月は生徒達の奴隷になった。生徒達は美月に理不尽な要求を突きつけ、心を蝕んでいく。奴隷誓約書を美月に書かせ、その通りに実行していくのだ。奴隷飼育のルールも課せられた。

月曜日はめんどりの日

火曜日はノーパンの日

水曜日は浣腸遊びの日

木曜日はバイブの日

金曜日は交尾の日

生徒達が決めたローテーション通りに奴隷調教は続いた。ノーパンの日には美月はミニスカートを穿いて勤務した。浣腸遊びの日には大量浣腸も経験した。

バイブの日には、男根型のバイブを膣に入れ抜け出ないようにパンティで押さえながら授業をした。交尾の日には男子生徒に抱かれた。鶏卵が呑めるようになってからアナルセックスが解禁となった。浣腸器も頻繁に使用された。やがて美月は美しい顔に屈辱感を滲ませながらも蜜を吐き出す牝となっていた。

数学教師は、レイプされた。レイプしたのは教え

子の男子生徒達だった。女子生徒達もその凄愴な現場にいた。縛られ、性交を強要された。何人もの男根が挿入された。恥ずかしい写真もたくさん撮られた。それをネタに脅迫され、言いなりになるしかなかった。女教師のすべては教え子達のものになったのだ。

身動きができなかった。強い力で押さえつけられていた。逃げても逃げても追いかけてくる顔のない異形な者。とうとう追い詰められ、足首を強い力でつかまれた。逃げられない恐怖。動こうにも動けない。叫ぼうにも叫べない。助けを求めることもできない。誰に助けを求めたらよいのかもわからない。もがけばもがくほどに絡まれ、ますます動けなくなる。異形な者はとうとうのしかり、そのおそろしい

顔が間近に迫る。よく知った顔が浮き上がる。顔をそむけた。まだ全身は金縛りにあったようにぴくりとも動かせない。突然、ふわっと体が軽くなっていた。すっと目覚めていく。夢だったのだ。

え！うそ…どうということ？…わたし…縛られているの？…どうして？

相葉美月は意識が徐々にはっきりとするにつれ、異常な状況に驚きを隠せなかった。身体が夢の中のよう動かせない。紐で縛られていた。肘掛け椅子に両足をのせ固定されている。恥ずかしいほどに股を開いた格好だ。両手も背もたれの後ろで縛られていた。

「いやあ！」

考えるより早く美月は叫んでいた。足を大きく開いたその股間をのぞき込むように人影があったのだ。

3人だった。男性だ。あろうことか、彼らは教え子

の生徒ではないか。河合蓮と近藤悠真そして今井蒼だ。3人とも美術部員だ。美月は美術部の副顧問だった。副顧問と言っても名ばかりで、滅多に部活動を覗くことはない。指導は美術教師が行っている。

28歳の女性教師だ。職員室にいることはほとんどなく、もっぱら美術科準備室に籠もっているのだろうと思っている。おとなしい女教師だが、ときおりはっとするような格好で勤務している。ミニスカートのものだ。それもパンストを穿いていないミニスカートで勤務しているのだ。教師らしくない格好だが、管理職は何も言わない。女性の服装について言及すればセクハラ扱いされるから黙っている。最近では、美月が放課後、美術教室に入るときには事前に知らせしてほしいとその女教師は言ってきた。不自然な要求だった。美術部副顧問の教師が美術室に入るのに事前に正顧問の教師に知らせろというのだ。美月は

不審に思いながらも先輩教師の言うとおりにした。
ますます美術室から足が遠のいた。

「先生に何をしているの！この紐を解きなさい！」
教え子の生徒とわかり、教師の威厳でまだ理解できない状況を打開しようとした。肘掛け椅子に足を開いた格好で縛られ、恥ずかしいことに股間をのぞき込まれている。さらに美月は下着姿にされていることによろやく気づいた。ブラとパンティだけの姿にされ緊縛されているのだ。

「早くはずしなさい！」

もう一度、教室で授業に集中できず騒がしい生徒達に向かって叱る口調で3人の教え子達に言った。

「どうして？」

顔を上げた河合蓮から思いもかけない言葉が返された。

「ふざけないで！ どうしてって言い方はないでしょ！ 先生にこんなことしていいと思っているの！」

美月は体温の急激な上昇を感じた。怒りがこみ上げてくる。教師に対してすることではない。いや、教師に対してというよりこれは犯罪だ。すぐにやめさせなくてはならない。

「これから先生を調教するのに解放するわけないよ」

近藤悠真も顔を上げ、理解できないことを言い出した。

「調教って・・・ふざけないで！」

美月の声が興奮で裏返る。

美月が帰宅すると、マンションのエントランスに白井沙也加と新田朱音が立っていたのだ。美月が担任する教え子達だ。沙也加がしくしくと泣いていた。朱音が泣いている沙也加の肩を抱きながら並んで立

っていた。美月はマンションの部屋に生徒を上げる
ことなど一度もなかった。生徒達に住所を伝えるこ
ともなかった。しかし、泣いている沙也加の様子か
ら尋常ではない事態だと察知した美月は二人を自室
に招き入れた。泣き続けている沙也加と付き添いの
朱音から事情を聞く前にミルクティーを出した。一
度席を立ち、頂き物のクッキーを菓子器に盛って彼
女らに振る舞った。

その頃には沙也加の様子も落ち着いていた。

「どうしたの？沙也加さん」

そこから記憶は曖昧になっている。意識が薄れてい
た。意識が戻ると、美月は下着姿で肘掛け椅子に両
足をのせた格好で緊縛され身動きできない状態だっ
た。そして教え子の河合蓮と近藤悠真そして今井蒼
が股間をのぞき込んでいたのだ。

「ふざけていないで早く紐を解きなさい。先生にこ

んなことして、冗談ではすまされないわよ！」

美月の語気が強くなる。

「冗談ではないですよ。先生をこれから調教するって言ったでしょ。」

河合蓮がそろりとパンティの上から美月の股間を撫でてきた。

「ひいっ！」

美月は教え子から恥部をパンティの上からではあるが触られた瞬間、思わず悲鳴をあげていた。股間を閉じようともがくが、緊縛された身体は自由にならない。

「やめなさい！」

美月はさらに怒気を強めて蓮をきりつとにらんだ。蓮はいっこうに恥部を触る指の動きを止めようとしがない。それどころか、美月の膣口あたりを押し込むように力を入れながら撫で、そのすぐ上の陰核を的

確に指腹で探り当てている。美月はぞくっとする感覚が脊髄を駆け上がってくる反応を知覚したが、教え子に嬲られるおぞましさと恥辱感で胸は張り裂けそうだった。

「先生を調教して奴隷にするんです」

近藤悠真もパンティの上から指先で美月の恥部を触りだした。蓮と悠真の指が美月のパンティの上を戯れるように滑り出す。

「奴隷なんて…バカなこと言わないで！」

「先生を従順な奴隷にするんです。きっと先生はぼくたちの期待を裏切らない素敵なお嬢様奴隷になってくれると信じていますよ」

今井蒼がスマホを構えていた。カシャッとシャッター音が響く。

「やめなさい！撮らないで！」

美月は恥ずかしい姿を撮影されていることに気づ

き、顔をそむけた。股間を閉じようとむなしい努力をする。ぎしぎしと緊縛されてる椅子がきしむ。パンティの上から恥部を触っていた蓮が美月の後ろに回り、両手で頬を挟み込んだ。そして人形の首をひねるようにくいと顔を正面に向けさせる。カシャッと蒼が構えるスマホのシャッター音が響く。

「そろそろ先生のおっぱいを見ようじゃないか」

悠真が美月のブラに指を這わせた。

「そうだな。まずはおっぱいだな」

美月の頬を両手ではさみ固定してた蓮が、首筋から胸元に指を滑らせ、そのままブラの隙間に差し入れていく。柔らかな膨らみが伝わってきた。

「いやあっ！」

美月はまた悲鳴をあげた。

悠真がブラを押し上げてくる。いよいよ美月は乳房をあらわにされるところだ。